

Teradata Everywhere™ 製品紹介

テラデータは「Teradata Everywhere™」という4本の柱から構成される製品戦略を基に製品を開発している。

- ① Analyze Anything
- ② Deploy Anywhere
- ③ Buy Any Way
- ④ Move Anytime

ここでは、この4本の柱を解説し、この戦略がアナリティクスを導入する企業の投資リスクを軽減するベネフィットを浮き彫りにする。



テラデータの長年の蓄積をフルに活用できる時代になった

テラデータは設立以来約40年に渡ってアナリティクスを専業とし、その可能性を追究し続けてきた。近年、デジタイゼーションによる圧倒的なデータ量の増加と、あらゆる種類のデータを収集、蓄積することが技術的にもコスト的にも可能になったことで、アナリティクスがもたらす価値が大きくなり、多くの企業が本格的にそれに取り組み始めている。

また、コンピューターパワーの増大に伴い、機械学習やディープラーニングを活用した分析モデルが実用的になり、従来困難だった分析が可能になったため、その適用分野が一気に広がった。

扱うべきデータの形式やデータ量が飛躍的に増大し、求められるビジネス要件が複雑化する現在、テラデータは、アナリティクス関連の商用製品で全てを実現することは困難と考えている。

そこでテラデータは、データ取り込み、モデル構築、ビジネス実装、運用・保守の全てのフェーズを包括し、一貫性のあるアナリティクスを実行するプラットフォームとして、後述するTeradata Analytics Platformを中核に置きつつ、オープンソースソフトウェア(OSS)や他社製品を適材適所に含めた、最先端のエコシステム・アーキテクチャを提供している。

Teradata Analytics Platform

「データウェアハウス」から最先端の「アナリティクス・プラットフォーム」へと進化



Analyze Anything

DWHから進化した最先端アナリティクスプラットフォーム Teradata Analytics Platform

製品戦略のTeradata Everywhereを構成する第1の柱、「Analyze Anything」。これは、分析ユーザーの目的や好みに応じて、世の中に存在するあらゆる分析機能、エンジン、ツール、言語を提供し、複数のデータ種別を活用できるような環境を提供することをコンセプトとしている。

テラデータはその実現のために、Teradata Database、Teradata Asterを含む様々な分析機能や分析エンジンの利用、多種多様なデータ種別へのアクセスを1つのサーバー上で有機的・動的に統合したTeradata Analytics Platformの提供を開始する。1つの分析プラットフォーム上に分析機能、エンジン、ツール、言語、データの格納先が予め用意されているため、ユーザーがそれらを集めて構成する必要がなくなる。ユーザーの構成負荷を最小限に抑えることができるのだ。

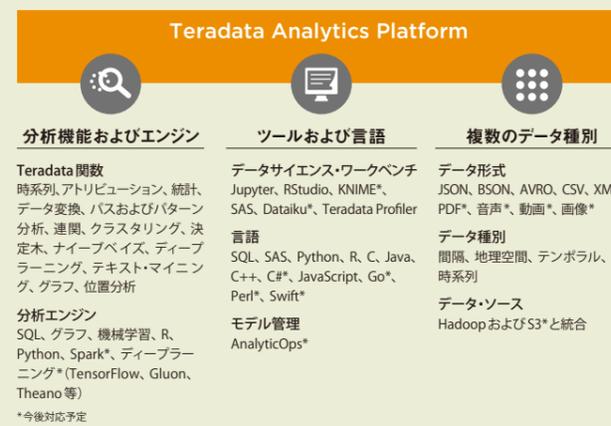
現在、Teradata Analytics Platformが提供を予定するものには、テラデータ製品のほか、他社製品、OSSも含まれている。一例を挙げると、分析エンジンとしては、SQL、グラフ、機械学習、Sparkがある。また、Python、TensorFlowなどのディープラーニング機能にも対応予定だ。対応する製品は継続的に拡大予定である。

Teradata Analytics Platformは、複数ノードの連携でペタバイト級のデータ処理も可能となるスケーラビリティを持つ。大量データを扱うためにHadoopやAmazon S3などのクラウドストレージとの接続もサポートする。

対応している製品はOSSも含めて、バージョンアップやパッチに対応しているため、システム運用の負荷が大幅に軽減される。Teradata Asterは機能拡張され、新たな分析機能およびエンジンとしてTeradata Analytics Platformに実装されている。

Analyze Anythingのベネフィットは、Teradata Analytics Platformの汎用性が極めて高く、分析プラットフォームをフレキシブルに構成できることである。それによって旧来からあるDWHサーバ、分析エンジン、分析アプリケーションと、ディープラーニングなどの新たなエンジンをエコシステムとして混在させ、それらを最適化することに役立つ。

様々な分析ユーザーの好みに対応



Deploy Anywhere

クラウドでもオンプレミスでも要件に応じてプラットフォームを選択可能

「Deploy Anywhere」とは、オンプレミスとクラウドの両方のデプロイ環境で同じソフトウェアを提供することを意味する。これにより、オンプレミスとクラウドのそれぞれのメリットを享受する、ハイブリッドクラウドソリューションを容易に実現することもできる。

また、クラウド上でのTeradataソフトウェアのパフォーマンスが極めて高いことは、テラデータ社内で行われたテストで実証されている。オンプレミスでもクラウドでも、性能やコストの差が大きいことが確認されている。

このことは極めて重要である。Teradataソフトウェアであれば、まずはクラウドで迅速に開発して、次々と試していくことが可能だからだ。

Deploy Anywhereは、デプロイ環境の柔軟な選択肢を提供する。アナリティクスのプラットフォームを現在の要件で決定し、将来的にはビジネスニーズの変化に応じて、プラットフォームを変更させなくなった時に、俊敏性をもって対応することができるのがベネフィットである。

またクラウドやハイブリッドクラウドを利用することで、コスト最適化がなされる点も特筆すべきベネフィットである。

デプロイ環境の柔軟な選択肢



Buy Any Way

少ない投資で始められる価格体系

「Buy Any Way」とは、お客様のIT投資スタイルの変化に合わせて、従来のパーペチュアルライセンスだけでなく、サブスクリプション型のライセンスを提供し、購入方法に柔軟性を提供していることを意味する。

ライセンスの種類はワークロードに応じて4種類に簡略化されており、それぞれのバンドル内には、Teradata Analytics Platformの中核的機能が全てパッケージされている。これにより製品選定の手間も削減できる。

従来ライセンス価格を決定するためには、ユーザー数、CPU数、ノード数などあらゆるワークロード指標を細かく組み合わせ計算し、これらの指標値が変更される都度見直しが行われていた。そのため予算計上時は数年先のスケールを見込む必要があり、投資計画の立案を難しいものにしてきた。それに対して、サブスクリプション型のライセンスでは、お客様はより小さな増分単位で追加購入することができ、ソフトウェアの費用を業務での使用状況に合わせる事が可能なため、投資計画時に頭を悩ませる必要がなくなるのだ。

シンプルな4種類の価格体系



さらにマネージドサービスであるTeradata IntelliCloudを活用すれば、顧客はas-a-Serviceで、煩わしいパフォーマンス管理、セキュリティ管理、可用性管理および変更管理から解放される。

それぞれの管理レベルも非常に高度だ。パフォーマンス管理では、パフォーマンス維持のため複数のインスタンス・タイプと、遅延防止のため複数のジオグラフィーを用意している。セキュリティ管理ではISO27001はもちろん、SOC1、SOC2、PCI、HIPAA規格に対応、システム監視とデータ暗号化を実行する。可用性管理は95%以上の可用性を保証し、バックアップも万全に行う。変更管理ではパッチ適用はもちろん、メジャーおよびマイナーバージョンアップとアップグレードも提供している。

またプライベートクラウド上でも、Amazon Web Services (AWS) や Microsoft Azure などパブリッククラウド上でも利用可能となっている。

Buy Any Wayのベネフィットは、簡略化されたバンドルモデルのシンプルなライセンス体系がサブスクリプション・ベースで提供されることと、Teradata IntelliCloudのas-a-Serviceが提供されることで、財務管理における煩わしさや無駄なコストの発生などのリスクが軽減されることである。

Teradata IntelliCloud™



Move Anytime

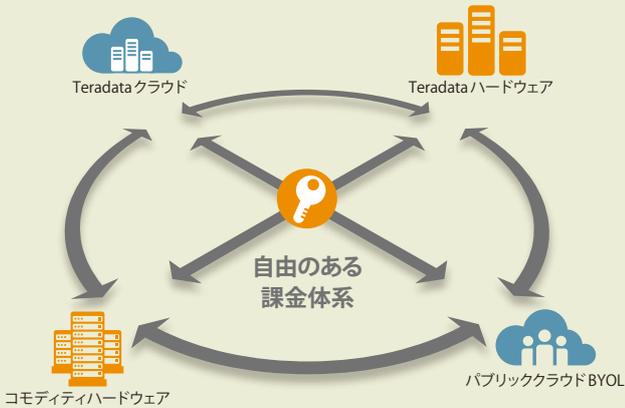
業界初のポータビリティのある サブスクリプション・ベースのライセンス

「Move Anytime」とは、オンプレミスかクラウドかを問わず、別のプラットフォームにいつでもライセンスを移行することができる、業界初のライセンス・ポータビリティを意味する。

アナリティクスにおいては、クラウドで開発して本番環境をオンプレミスに移行することが頻繁に行われる。この際にいちいちライセンスの移行契約をしては、業務運用面での俊敏性が損なわれることになる。

Move Anytimeのベネフィットは、ビジネスの進展に応じて、ライセンスを買いなおす必要なく、自由にライセンス移行ができるようになることで、運用面での多大な俊敏性がもたらされることである。

ポータビリティのあるサブスクリプション・ベースのTeradataライセンス



Teradata Everywhere戦略の4本の柱を紹介してきた。これらがもたらすベネフィットに共通することは、「顧客のアナリティクスへの投資リスクを最小限にまで低減すること」にある。特にこれからアナリティクスを始めようとする企業にとっては、本当に成果が出るのか不明なアナリティクスに多大な投資をするのは極めてハードルが高い。そのハードルを下げるための提案が、Teradata Everywhereなのだ。

テラデータのエコシステム・アーキテクチャを牽引する IntelliSphere™

Teradata Analytics Platformを中核にOSSなどを組み合わせた、テラデータのエコシステム・アーキテクチャを構成する重要なソフトウェア・ポートフォリオが「IntelliSphere™」である。これは、データの取り込み、アクセス、展開、管理の各機能を実行するソフトウェア製品をパッケージ化したものであり、最新バージョンの製品を使い放題というサブスクリプション・ベースのライセンスで提供される。さらに、契約期間内にIntelliSphereに新たに追加された製品も使うことができる。

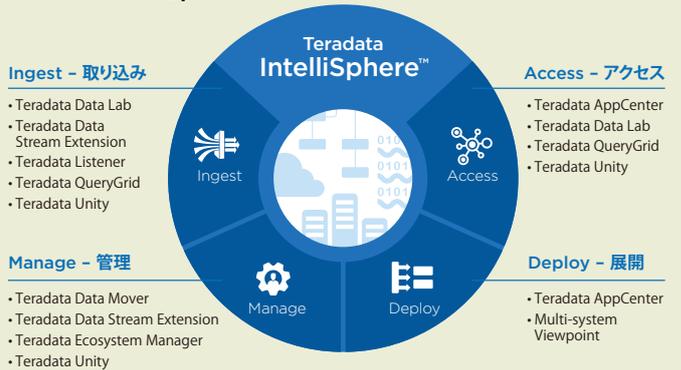
いくつか代表的な製品を紹介しよう。

- QueryGrid: Teradata, Hadoop, Presto等を含む多様なプラットフォームに対して、SQLでの透過的アクセスを実現するコネクタ製品。
- Unity: 複数Teradataシステム間でのクエリーのルーティングとデータ同期を管理するツール。ディザスタリカバリー用のレプリケーション構築が容易に行える。

- AppCenter: ブラウザ上からセルフサービスにて、分析結果の取得やビジュアライゼーションの共有に貢献するツール。
- Data Mover: TeradataデータベースとHadoop間のデータ移動を実現するツール。差分送信で高速化を図ることも可能。状況に応じて使用するユーティリティーが自動的に選択されるため、運用管理者の負荷軽減につながる。

IntelliSphereは、テラデータ製品とOSSや他社製品を適材適所に組み合わせたエコシステム・アーキテクチャを実現しつつ、エンタープライズレベルのアナリティクスを可能とするソフトウェア・パッケージであり、このような製品を提供できることがテラデータのユニークさであり、強みだと言える。

Teradata IntelliSphere™



AIの本質はアナリティクス

機械学習のコードや分析ツールといった限定された領域においてAIソリューションを提供するベンダーは多いが、テラデータはそれだけで十分なAIソリューションが提供されるとは考えていない。その周辺にあるデータ取り込み、データクレンジング、運用管理、モニタリング、ビジュアライゼーションなどのあらゆる機能を包括的に提供することが重要と考える。

企業が求めるAIの本質はアナリティクスにあり、アナリティクスは単なる分析ではなく、その結果をビジネスに実装することを含めた概念だとテラデータは考える。

Teradata Everywhereのコンセプトと、それを実現する製品ポートフォリオは、ビジネスが求めるAIの実装に貢献するものなのである。

AIを活用したアナリティクス工程を包括する テラデータの製品ポートフォリオ

